3 月 20 日のメッセージ

聖書：マルコによる福音書　8：　27 – 33

「神のことを思わず、人間のことを」

「禍福は糾える縄の如し」という言葉があります。禍いと福とは入れ替わり変転するという意味です。弟子たちの歩みはいつもこんな調子です。少し良いことがあったと思えば、すぐに奈落の底に突き落とされるのです。

イエスは弟子たちに問われました。「あなたは私を信じているか」と。

ペトロは自分の心に正直に、そして真実を述べます。「あなたは、メシアです」(マルコによる福音書 8:29)。この時のペトロの心境はどのようだったでしょうか。きっと、「ついに自分の信仰を言い表すことができた」と高揚したことでしょう。

イエスの全ての慈しみが今、自分に注がれている。そう感じたとしてもおかしくはありません(「慈しみをいただいて、わたしは喜び躍ります。……」詩編 31:8)。救い主が共におられる。もう何の心配もいらない。私たちは地上で最大の幸福を得ている、と。

しかし次の瞬間、盛り上がっていたペトロの心に冷や水が浴びせられます。救い主であるはずのイエスが、目の前から取り去られる日が来るというのです(「……人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、……」マルコによる福音書 8:31)。それも近いうちに。しかも、単に取り去られるだけではありません。多くの苦しみを受けられるとまで言われます。心配はなくなったはずではなかったのでしょうか。あまりの落差にペトロの心はついて行くことができません。慌ててイエスを諌め始めます。そんなことはあり得ないはずだ。だから、「そんなことを言わないでほしい」と。

ところが、イエスはペトロを叱られるのです(「イエスは……ペトロを叱って言われた。『サタン、引き下がれ。……』」マルコによる福音書 8:33)。ペトロからすれば、イエスのために、また皆のために言ったと思っていますから、二度びっくりです。しかも、「サタン」とまで言われて、三度びっくりしたことでしょう。

確かにイエスは苦難と死について語られました。しかしそれは、ただ単なる苦しみではありません。イエスはただ、「新しい契約」(「見よ、わたしがイスラエルの家、ユダの家と新しい契約を結ぶ日が来る、と主は言われる。」エレミヤ書 31:31)の始まりについて言われたのです。人間の目には隠されていた始まりが、もうまもなくやってくる、と(「お前の聞いていたこと、そのすべての事を見よ。自分でもそれを告げうるではないか。これから起こる新しいことを知らせよう／隠されていたこと、お前の知らぬことを。」イザヤ書 48:6)。それを人間の判断で押しとどめることなどできはしません。だから、分不相応に諌めるのだと叱られたのです(「お前は聞いたこともなく、知ってもおらず／耳も開かれたことはなかった。……」イザヤ書 48:8)。「あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている」(マルコによる福音書 8:33)と。

イエスはむしろ期待を込めて呼びかけておられるのです。確かに厳しい状況がやってきます。しかし、「神の力に支えられて、福音のためにわたしと共に苦しみを忍んで」(テモテへの手紙二 1:8)ほしい。「三日の後に復活することになっている」(マルコによる福音書 8:31)のだから、安心して共に歩もう、と。

「人間万事塞翁が馬」。苦しいと思うときこそ救いの始まりです。今のこの厳しい状況も完全な救いへの入り口です。「神のことを思い、そして人間のことを思いながら」共に歩んで参りましょう。